

平成31年度

一般入学試験B日程 学科試験問題

国語

1. 試験時間は、60分間です。
2. 問題は、この冊子の1～21ページにあります。解答用紙は別に2枚あります。
3. 解答は、解答用紙の問題番号に対応した解答欄に記入してください。
4. 問題や解答を、声に出して読んではいけません。
5. 印刷の不鮮明、用紙の過不足については、申し出てください。
6. 問題や解答についての質問は、原則として受け付けません。
7. 終了の合図があったら、すぐ筆記具を置いて、解答用紙を机の上に伏せてください。
8. この問題用紙は、持ち帰らないでください。
9. 不正な行為があった場合は、解答をすべて無効とします。
10. 答案の文字は、ていねいに、かつ明瞭正確に書いてください。
11. その他、試験の進行については、監督者の指示に従ってください。

植草学園大学 発達教育学部

受験番号		氏名	
------	--	----	--

第一問 「第一問の1ページから6ページは、著作物使用許諾後にホームページに公開します。」

第二問 次の文章を読んで、後の問い（問1〜6）に答えなさい。

町一番の絹問屋の娘お留伊は十五歳。冷たく勝ち気で驕った心がうかがえる、目鼻立ちが極めて美しい娘である。小鼓の名手で、来る正月に都城で行われる鼓くらべで勝つため連日一心不乱に稽古をしているが、ここ数日それを庭の外から聴いている老人がいることに気づく。老人は旅の絵師と言ひ、町外れの松葉屋という宿で持病を養っているという。数日後松葉屋の娘がお留伊のもとに来て、病状の悪化した老人が死ぬ前にもう一度お嬢様の鼓を聴きたいと申すので来てほしいと告げる。お留伊が宿に行くとき老人は鼓を聴く前に話したいことがあるといひ語り始める。

十余年まえに、観世市之丞と六郎兵衛という二人の囃子方があつて、小鼓を打たせては竜虎と呼ばれていたが、二人とも負け嫌いな烈しい性質で、常づね互に相手を凌ごうとせり合っていた。……それが或年の正月、領主前田侯の御前で鼓くらべをした。どちらにとつても一代の名を争う勝負だったが、殊に市之丞の意気は凄しく、曲なかばに到るや、精根を尽くして打込む気合で、遂に相手の六郎兵衛の鼓を割らせてしまった。

打込む気合だけで、相手の打っている鼓の皮を割ったのである。一座はその神技に驚嘆して、「友割りの鼓」といまに語り伝えている。

「わたくしは福井の者ですが」

と老人は話を続けた。「……あのとときの騒ぎはよく知つて居ります、市之丞の評判はたいそうなものでございました。……けれど、それほどのア面目をほどこした市之丞が、それから間もなく何処かへ去つて、行衛知れずになつたということをお守り存じでございませうか」

「それも知っています。あまり技が神に入つてしまったので、神隠しにあつたのだと聞いています」

「そうかも知れませんが、本当にそうかも知れません」

老人は息を休めてから云つた。「……市之丞はある夜自分で、鼓を持つ方の腕を折り、生きてゐる限り鼓は持たぬと誓つて、何処ともなく去つたと申します。……わたくしはその話を聞いたときに斯う思いました。すべて芸術は人の心をたのしませ、清くし、高めるために役立つべきもので、そのために誰かを負かそうとしたり、人を押退けて自分だけの欲を満足さ

せたりする道具にすべきではない。鼓を打つにも、絵を描くにも、清浄な温かい心がない限りなんの値打もない。……お嬢さま、あなたはすぐれた鼓の打ち手だと存じます、お城の鼓くらべなどにお上りなさらずとも、そのお手並は立派なものでございます。おやめなさいまし、人と優劣を争うことなどはおやめなさいまし、音楽はもつと美しいものでございます、人の世で最も美しいものでございます」

お留伊を迎えに来た少女が、薬湯を嚙む刻だと云って入って来た。……老人は苦しげに身を起して薬湯を啜ると、話し疲れたものか暫く凝乎と眼をつむっていた。

「では、聴かせて頂きましょうか」

老人はながい沈黙のあとで云った。「……もう是が聴き納めになるかも知れませんが、失礼ですが寝たまままで御免を蒙ります」

金沢城二の曲輪に設けられた新しい楽殿では、城主前田侯をはじめ重臣たち臨席のもとに、嘉例の演能を終って、すでに、鼓くらべが数番も進んでいた。

これには色々な身分の者が加わるので、城主の席には御簾が下されている。お留伊は控えの座から、その御簾の奥をすかし見しながら、幾度も総身の顫えるような感動を覚えた。……然しそれは気臆れがしたのではない。楽殿の舞台でつぎつぎに披露される鼓くらべは、まだどの一つも彼女を懼れさせるほどのものがなかった。彼女の勝は確実である。そしてあの御簾の前に進んで賞を受けるのだ。遠くから姿を拝んだこともない太守の手で、一番の賞を受けるときの自分を考えると、その誇らしさと名誉の輝かしさに身が顫えるのであった。

やがて、ずいぶん長いときが経ってから、遂にお留伊の番がやって来た。

「落着いてやるのですよ」

師匠の仁右衛門は自分の方でおろおろしながら繰返して云った。「……御簾の方を見ないで、いつも稽古するときと同じ気持でおやりなさい、大丈夫、大丈夫きつと勝ちますから」

お留伊は静かに微笑しながらうなずいた。

相手は矢張り能登屋のお宇多であった。曲は「真の序」で、笛は観世幸太夫が勤めた。……拝礼を済ませてお留伊は左に、お宇多は右に、互の座を占めて鼓を執った。

そして曲がはじまった。お留伊は自信を以て打った。鼓はその自信によく応えて呉れた。使い慣れた道具ではあったが、かつてそのときほど快く鳴り響いたことはなかった。……三ノ地へかかったとき、早くも充分の余裕をもったお留伊は、ちらと相手の顔を見やった。

お宇多の顔は蒼白め、その唇はひきつるように片方へ歪んでいた。それは、どうかして勝とうとする心をそのまま絵にしたような、烈しい執念の相であった。

その時である、お留伊の脳裡にあの旅絵師の姿がうかびあがって来た、殊に、いつもふところから出したことのない左の腕が！——あの人は観世市之亟さまだった。

お留伊はイ愕然として、夢から醒めたように思った。

老人は、市之亟が鼓くらべに勝ったあとで自分の腕を折り、それも鼓を持つ方の腕を、自ら折って行衛をくらましたと云ったではないか。……いつもふところへ隠している腕が、それだ。——市之亟さまだ、それに違いない。

そう思うあとから、眼のまえに老人の顔があざやかな幻となって描きだされた、それからあの温雅な声が、耳許ではつきり斯う囁くの聞いた。……音楽はもっと美しいものでございます、お留伊は振返った。そして其処に、お宇多の懸命な顔を見つけた。眸のうわずった、すでに血の気を喪った唇を片方へひき歪めている顔を。

——音楽はもっと美しいものでございます。またと優劣を争うことなどおやめなさいまし、音楽は人の世で最も美しいものでございます。老人の声が再び耳によみがえって来た。……お留伊の右手がはたと止った。

お宇多の鼓だけが鳴り続けた。お留伊はその音色と、意外な出来事に驚いている客たちの動揺を聴きながら、鼓をおろしてじっと眼をつむった。A老人の顔が笑いかけて呉れるように思え、今まで感じたことのない、新しいよろこびが胸へ溢れて来た。そして自分の体が眼に見えぬいましめを解かれて、柔かい青草の茂っている広い広い野原へでも解放されたような、軽い活々とした気持でいっぱいになった。

——早く帰って、あの方に鼓を打ってあげよう、この気持を話したら、きつとあの方はよろこんで下さるに違いないわ。

お留伊はそのことだけしか考えなかった。

「どうしたのです」

舞台から下りて控えの座へ戻ると、師匠はすっかり取乱した様子で詰った。「……あんなに旨く行ったのに、なぜやめたのです」

「打ち違えたのです」

「そんな馬鹿なことはない、いやそんな馬鹿なことは断じてありません、あなたはかつてないほどお上手に打った。わたくしは知っています、あなたは打ち違えたりはしなかった」

「わたくし打ち違えましたの」

お留伊は微笑しながら云った。「……ですからやめましたの、済みませんでした」

「あなたは打ち違えはしなかった、あなたは」

仁右衛門は躍起となつて同じことを何十回となく繰返した。

「……あなたは打ち違えなかった、そんな馬鹿なことはない」と。

父や母や、集っていた親族や知人たちにも、お留伊はただ自分が失敗したと告げるだけであつた。B誰が賞を貰つたかという^{こと}とももう興味がなかつた、ただ少しも早く帰つて老人に会いたかつた。森本へ帰つたのは正月七日の昏れがたであつた。疲れてもいたし、粉雪がちらちらと降っていたが、お留伊は誰にも知れぬように裏口から家を出て行った。

「まあお嬢さま！」

松葉屋の少女は、不意に訪ねて来たお留伊を見て驚きの眼を瞠^{なま}つた。……そして直ぐ、訊かれることは分つていふという風に、

「あのお客さまは亡くなりました」

とあたりまえ過ぎる口調で云つた。「……あれから段々と病気が悪くなるばかりで、到頭ゆうべお亡くなりになりました。

今日は日が悪いので、お葬いは明日だそうでございます」

お留伊は裏の部屋へ通された。

老人は北枕に寝かされ、逆さにした枕屏風と、貧しい櫛の壺と、細い線香の煙にまもられていた。……お留伊は顔の布をとってみた。衰えきった顔であった、つぶさに嘗めて来た世の辛酸が、刻まれている皺の一つ一つに浸みこんでいるのである。けれどいままでは終わった、cもうどんな苦しみもない。困難な長い旅が終って、老人はいまやすらかな、眼覚めることのない眠の床に就いているのだ。

D——ようなさいました。

お留伊には老人の死顔が、そう云って微笑するように思えた。

——さあ、わたくしにあなたのお手並みを聴かせて下さいまし。

「わたくしお教で眼が明きましたの」

お留伊は囁くように云った。「……それで色々なことが分りましたわ、今日まで自分がどんなに醜い心を持っていたか、どんなに思いあがった、嗜のない娘であったか、ようやくそれが分りましたわ、それで急いで帰って来ましたの、おめにかかって褒めて頂きましたものですから」

お留伊の頬にはじめて温かいものが滴った。それから長いあいだ、袂で顔を蔽いながら声を忍ばせて泣いた。……長いあいだ泣いた。

「今日こそ本当に聴いて頂きます」

やがて涙を押し拭って、お留伊は袂紗を解きながら囁いた。「……今までのようではなく、生まれ変わった気持で打ちます、どうぞお聴き下さいまし、お師匠さま」

今はもう、老人が觀世市之亟であるかどうか確めるすべはない、けれどお留伊はかたくそう信じているし、またよしそうでないにしても、Eその老人こそ彼女にとってはその師匠であった。

(山本周五郎『鼓くらべ』より)

* 出題の都合上、原文の一部分を改変してあります。

問1 傍線部ア～ウの本文における意味として最も適するものを、それぞれ後の1～4の中から一つ選びなさい。

ア 面目をほどこす

- 1 勝利を約束されていた人が、失敗をする
- 2 勝負には負けたが、評判だけは高くなる
- 3 立派な成果をあげ、一段と評価を高める
- 4 勝敗に関わりなく、世間的な名誉を得る

イ 愕然として

- 1 恐ろしさにふるえて
- 2 勢いよくおごそかに
- 3 ものに動じない様で
- 4 ひどく驚いたように

ウ 躍起となって

- 1 むきになって熱心に
- 2 間違いを責めたてて
- 3 おこって諭すように
- 4 おどろき跳躍をして

問2 傍線部A「老人の顔が笑いかけて呉れるように思え、今まで感じたことのない、新しいよろこびが胸へ溢れて来た」とありますが、このときのお留伊の心情として最も適するものを、次の1～4の中から一つ選びなさい。

- 1 負けることでみにくい争いを終結させれば、老人に褒めてもらえるに違いない。
- 2 松葉屋で老人が語った言葉の真の意味を、身をもって理解できともうれしい。
- 3 眸がうわずっていて歪んだお宇多の顔を見ると、競うことは醜くくて可笑しい。
- 4 ここで競技をやめることで競う苦しみから解放され、安心できてよろこばしい。

問3 傍線部B「誰が賞を貰ったかということももう興味がなかった」とありますが、その理由の説明として最も適するものを、次の1～4の中から一つ選びなさい。

- 1 お留伊の小鼓の技量が誰よりも上だということは、関係する人にはわかっていたから。
- 2 鼓くらべで最後まで演奏していれば自分が賞をもらえたことは、確信できていたから。
- 3 このような結果にした気持を一刻も早く老人に知らせたいと、一途に思っていたから。
- 4 競うことを自ら避けた以上結果について論じることはできないと、得心していたから。

問 4 傍線部 C 「もうどんな苦しみもない」とありますが、老人の苦しみの根源はどのようなことにあつたと考えられますか。最も適するものを、次の 1 ～ 4 の中から一つ選びなさい。

- 1 きわめて優れた小鼓の技を、名誉を争う勝負の具としたこと。
- 2 自ら腕を折り、片手だけで生きなければならなくなったこと。
- 3 大好きだった小鼓を演奏できずに、絵の道で生きてきたこと。
- 4 まずしい旅絵師の道を選んだために、孤独な死を迎えたこと。

問 5 傍線部 D 「――ようなさいました」とありますが、これは (i) 誰が、(ii) 何をしたことに対する言葉ですか。(i)・(ii) について、簡潔に答えなさい。

問 6 傍線部 E 「その老人こそ彼女にとってはその師匠であつた」とありますが、お留伊が老人から学んだことの本質を述べている一文の始めの五字を抜き出さなさい。

第三問 次の文章を読んで、次の問い（問1～7）に答えなさい。

下駄を履いてきなさい、という助監督の指示に従ってスタジオのセットで監督を待っているところに久松静児監督が巨体をゆすって入ってきた。助監督氏の紹介を受けて「初めまして」と挨拶したら、監督は僕の足元を見るなり「なんで靴を履いてこないんだ、バカモン！」と言いきま、丸めたゲンコツで僕のおでこをぐいと押したのだ。おい、これはいったいなんなんだ。突然の監督の怒りと「理不尽さに信じられぬ思いで、下駄を履いてこい」というから履いてきたんじゃないですか、と抗議を口にしようとしたとたんに、今度はいきなりシャツの襟首を掴まれ、「ほら、さっさと芝居をしてみろ」と放り出され、たたらを踏んでつんのめった僕の弱腰を監督は足でポンと蹴り、「ヨーイ、スタート」と言った。あまりの傍若無人さに、まさに啞然とする中で、猛然と怒りが湧き上がってきた。こんな馬鹿なことが世の中にあるのか、いやあつていいのか。たとえ大部屋の新人俳優とはいえ、奴隷じゃないぞ、こりや目茶苦茶じゃないか。姿勢を立て直した僕は久松監督の赤ら顔を満身の怒りをこめて睨み返した。冗談じゃないぞ、心まで売り渡しているんじゃないぞ、僕は心の中で叫んでいた。監督は、そんな僕を見て、「おいおい怒ってんのか、いっぱしに生意気な顔して、ほら、なんでもいいから芝居をやってみろ、下手くそ」といった。そしてまた僕の襟首を掴もうとした手を僕はさっとかいくぐって「襟首を掴むのをやめてください」といった。監督は瞬間、にやりと面白そうな顔をして「おつかないな」などといいながら妙に上機嫌であった。この日、僕は監督に最後まで喧嘩腰で相対した。僕は心の中で決心していた。もし、もう一度襟首を掴んで腰を蹴るようなことをしたら、このスタジオを出て行こうと。しかし「ばか」「へたくそ」「なんなんだその芝居は」を連発したものの、その後、襟首を掴んだり腰を蹴ったりはしなかった。こうして漸くセットの一日が終ったとき、僕は久松組をおろして貰おうと、まなじりを決して制作主任の部屋を訪ねた。なに？ という眼で迎えた主任に、僕は「この組から外してください」と真剣に申し入れたのだが返ってきた主任の言葉は意外であった。なんと「久松監督は君のことをとても褒めてたぞ」であった。

俳優の仕事が如何に勇氣と気力を必要とするかを実感したのは、撮影所に入って早々のことであった。芝居が上手いかまづいかより、いや演技力があるかないかより先ず真つ先に問われて、何よりも一番大事なことは、いついかなるときでも

^B「ファイティング・ポーズを取り続けることができるかということなのだ」ということを知ったのだ。

弱肉強食の世界、売れている者が勝ち、の社会であれば当然のことながら新人は先輩たちからむしられるのだ。このむしりに一度でも悲鳴をあげたら一巻の終りだ。雄々しく闘わなくてはならない。敵は探りを入れているのだ、どんな奴かと。根性があるのか、無いのかを。いじめ甲斐があると知れば、それこそ絶対の^ウ餌食で、弱いところを見せたら、一斉にそこを狙^{ねら}って攻めこまれる。そしてこの瞬間から、この俳優の輝きは失せる。人格を失うのだ。しかも撮影の現場が、ハリウッドの西都劇の決闘シーンではないが、日々、^Cシヨウダウンの場であることを痛感させられたのは堀川弘通監督の映画でのことであつた。

「カット」という堀川弘通監督の声がかかったとき、出演者、スタッフ全員が固唾^{かたず}を呑むように監督の顔を見つめた。暫し^{しば}張りつめた沈黙があつたあと監督は静かだが、凜^{りん}とした声で言った。「もう一回行こう」と。この瞬間、撮影部の助手たちから声にならない悲鳴がもれた。カメラのチーフがカメラマンに向つて真剣な顔でふるえるような小さい声でささやいた。カメラマンは堀川監督に向き直り「申し訳ありませんがフィルムが無くなりました」と告げた。スタジオの中を異様な波が走つた。堀川監督はおもむろに助監督のチーフを呼び、話をする、チーフは立ち上がり、大声で、今日の撮影はフィルム・アウトで中止します、今日の分はまた明日このスタジオで、と全員に告げた。

時ならぬ突然の中止にスタジオからぞろぞろとスタッフ、出演者が外に出る中で古参の大部屋俳優の一人が、フィルムが無くなつて撮影中止というのは撮影所始まつて以来、恐らく前代未聞のことじゃないか、などと声高^{こゝろたか}に話し、周囲からも「そうかもよ」などとの声が続つもあがつた。

このとき、まだ撮影所に入ったばかりの僕が初めて知つたことは、黒澤組、青柳組、堀川組といった映画の撮影に取り組んでいる各組は、毎日、その日に使用するフィルムの量をあらかじめ想定して、これはカメラのチーフが助監督と撮影シーンの長さやカット数を勘案して、一日分として撮影所の保税倉庫からフィルムを決めたフィート分だけ蔵出ししてくるのだ。だから、その日のフィルムが無くなつてしまつたからといって、俄^{にわか}に追加分を出してくることはできないシステムになっている。従つてフィルムが無くなれば撮影はできないのだ。カメラの助手たちが^D青くなつたのはよくわかる。しかし、この日のフィルム・アウトは誰一人として予想しなかつたことだつたのだ。

すべての原因は堀川監督の「もう一回」にあった。映画のタイトルは仲代達矢氏主演の話題作「青い野獣」。この日の中止になったシーンは俳優座の座長である千田是也氏と女優の司葉子さんの確か父娘のシーンであった。四十三年前という余りにも遠い昔のこととなったため記憶が定かではないのだが、心に残っている印象ではグラランドピアノの置いてある部屋での父と娘の対話のシーンであったように思う。問題のシーンは当時の一カットとして異例ともいえる長さの、俗にいう長回しのワンシーン、ワンカットの井カットであった。レールを敷いて、カメラがぐんと中に突っ込んでまた戻ってくる間にパンもあるという、言わばカメラマンの腕の見せ処。この時のカメラマンは名カメラマンと謳われた中井朝一さん。カメラの台車を引くのはこれまたこの道の名人特技マンの関根親分。テストを重ね、用意万端整い、さあ本番ということとなった。堀川監督の「ヨーイ」でフィルムが回り、「スタート」でカチンコが鳴り芝居がはじまった。緊張の中を長いカットが進行し、すべて順調に行き芝居も終り、監督の「カット」の声がかかった。カメラも照明も音声も全部OKの声が集まり、誰しも堀川さんのOKがかかると思つた、そのとき、渋い顔を解いた堀川さんは「もう一度行こう」と言つた。この瞬間の千田是也さんの顔が忘れられない。またスタッフの誰もが、一様に「えっなぜ？」という顔をしたのも忘れられない。一斉に堀川監督に視線が集まつたが、監督はまったく無表情でいる。慌ててチーフ助監督が「ハイ、もう一回行きます」といい、「テイク・トゥー」の声が入り、「ヨーイ、スタート」でまたカチンコが鳴り、「カット」の声がかかった。今度も技術部はすべてOKで演技もセリフのとちりもなしだった。ところが、監督は、また暫し考える顔をしたあと、あっさり「もう一回」と言つた。実はこの辺りから少しずつスタジオ内に張りつめた空気が流れはじめた。誰もが、OKと思つてるのに監督がOKを出さないことに、何か尋常ではないものを感じはじめたのだ。

俳優座の総帥である千田是也氏。演技に関してはマスター、名優と呼ぶにふさわしい千田是也氏はといえば、どこが悪いんですか、と堀川監督に訊くこともなく、また監督もどこがダメなのかのダメ出しもなく、事態は次第に両者の間に火花が散る如く、セリフのとちりもなく、見た目の芝居の失敗もなくテスト通りにパーフェクトに終り、技術陣も見事な力を発揮し、OKという声が続くのに、堀川監督はむつつりと何も喋らずに、ワンカットを撮り終る毎に、「もう一回」を繰り返す。しかも、そのNG回数は二十四回にも及び、テイク二十四を撮り終えたときの「もう一回」で、ついに冒頭のフィルム・アウトで中止ということとなったのだ。現場にたまたま居合わせた僕は恰も、二人の壮絶な西部劇のシヨウダウン、デ

ユエルを見る思いで興奮の中で事の成行きを見守ったのだった。

まさにそれは両者の意地と意地のぶつかり合いであった。もはや演技云々の問題ではなく、以下は僕の勝手な想像、エ憶測なのだが、堀川監督は、自分がこの組のボスであり、すべてはたとえ相手が名優であろうとも自分の判断で決めるのだということを、千田さんに、最初の出会いで明確に伝えようとしたのではないか。つまり演劇界の重鎮とは申せ、映画を創る監督は俺なんだということを、見せようとしているうちに、ついにはお互いの強い意地の張合いとなったという風に思えてならない（堀川監督、間違っていたらごめんなさい）。最後まで、なぜ撮り直すのか、説明を求めないで平然と演技を続ける千田氏もF威厳と凄みがあつて、感動的であつたが、堀川監督の意地の張り方も凄く、深く肝に銘じた記念すべき経験であつた。かくして新劇界の重鎮と映画界の気鋭の監督とのこの日の激突は忘れられない出来事となつたのであつた。

（児玉清『負けるのは美しく』より）

*出題の都合上、原文の一部分を改変してあります。

問1 傍線部ア～エの意味と最も類似した言葉を選び、漢字で書きなさい。

ア 1 フセイゴウ

2 ヒジョウシキ

3 ムリカイ

4 フゴウリ

イ 1 ブサイク

2 ブキリヨウ

3 フアンテイ

4 フカカイ

ウ 1 ショクモツ

2 ジャクテン

3 ヤリダマ

4 ヒョウテキ

エ 1 ヘンケン

2 スイリヨウ

3 ハンダン

4 シコウ

問2 傍線部A「心まで売り渡しているんじゃないぞ」の本文における意味は何か。その意味に合わないものを、次の1～4の中から一つ選びなさい。

1 仕事の指示は受け入れるが、仕事以外は受け入れない。

2 納得できることは受け入れるが、納得できないことは受け入れない。

3 自分の信念に合うことはやるが、信念に合わないことはやらない。

4 自分の人間性を尊重すれば従うが、尊重してくれなければ従わない。

問3 傍線部B「フアイティング・ポーズをやり続けること」とはどのような意味か。それを説明するのに最も適するものを、次の1～4の中から一つ選びなさい。

- 1 誰にでも、勝敗を第一に考え負けない態度を示すこと。
- 2 目上の人にもいつも反抗的にはむかい続けること。
- 3 どのような事柄に対しても頑固に意地を張り続けること。
- 4 理不尽な状況であっても正面から立ち向かうこと。

問4 傍線部C「ショウダウン」と同じ意味の言葉を二つ本文より抜き出しなさい。

問5 傍線部D「青くなった」のはなぜか。それを説明した文として最も適するものを、次の1～4の中から一つ選びなさい。

- 1 撮影中止という大変な事態になったから。
- 2 この事態に大変驚いたから。
- 3 監督にあきられると思ったから。
- 4 事態に無念さを感じたから。

問6 傍線部Eの「何か尋常ではないもの」とはどういう意味か。それを説明した文として最も適するものを、次の1～4の中から一つ選びなさい。

- 1 監督の不透明な賭け
- 2 監督の異様な理想主義
- 3 監督の強い意志
- 4 監督の不当な完全癖

問7 傍線部Fの「威厳と凄み」の意味は何か。それを説明した文として最も適するものを、次の1～4の中から一つ選びなさい。

- 1 監督の指示を真剣に受け止める真面目さ。
- 2 監督のひどい仕打ちをはねかえす固さ。
- 3 監督の異様な要求に混乱しない強さ。
- 4 監督のもたらす試練を受容する鷹揚さ。